

第60代横綱 ふた は ぐるこう じ  
双羽黒光司

**横綱ってというのは、人間が持っている根底を自負するものだと思うんです。それが強ければ強いほど、強い横綱であるわけです。**

昭和38年生まれの私や保志（のちの横綱北勝海＝現八角親方）は、「サンパチ組」と呼ばれたこともあって、入門当初からライバル心がけっこう強かったんです。

私が幕下に上がったのは、17歳になってすぐのこと。幕下までは私が同期のトップだったんです。でも、幕下から十両へは、私よりも早く上がった人間が何人もいるんで、まあ、抜きつ抜かれつという状況だったわけなんです。

保志なんか、10代で関取になって、バーツと番付を上げたものだから、彼が三役になった時、私はまだ幕下でした。一時はそれくらい差をつけられたんです。

あと、年齢は少し上ですけど、同世代で言えば益荒雄さん（現阿武松親方）とかも勢いがありました。私たちが若かった時代って、もう常に「走っている」というのが基本だったから、上に上がった人間も多かったと思います。入門した時期は遅いものの、38年生まれということでは小錦なんかもいました

んで、まわりはライバルだらけという感じでしたね。そう、自分たちが時代の主役で、強敵でありながら友人...みたいな感じです。

サンパチ組の中で特に負けたくないと思っていたのは、さっきから話に出ている保志。同期のやつらは、入門したての頃、相撲教習所で私を見て、「あまりにも大きくて、ビビった」なんて言ってくれていたみたいですけど、小柄な保志は保志で、すごく目立っていました。

よく、相撲は大柄なほうが有利と言われますよね。でも、全部が全部そうではないんです。大柄な人は大柄な人、小柄な人は小柄な人で、その体を生かす技が違います。大きさだけではない。

「黒船、来襲」などと言われ、小錦が元気いっぱい暴れていた頃のこと。稽古場で千代の富士さん(現九重親方)が小錦に、まるで一本背負いのような技をかけた。そしたら、250キロの小錦が宙を舞ったんです。あれにはビックリしました。

その人、その人で得意とする技があって、それがはまればそういうことができるわけです。それが相撲なんです。だから、相撲をやっている少年たちも、体が小さいからと言って、夢をあきらめないでほしいと思うんです。

私の場合を振り返ってみても、体重が2倍近くある小錦なんかは、けっして不得意な相手ではなかったんです。逆に体重が少ないとか、小柄な力士のほうが取りづらかったかな？

そういう意味でも、保志はライバルだったし、やりづらい相手だったんです。幕内の対戦成績を見ても、通算で9勝8敗だから、ほとんど五分五分ですよ。もちろん、あっちも負けたくない気持ちで当たってくるから、いい相撲が多かったんですよ。

私を含めて、サンパチ組の目標といえば、やはり千代の富士さんです。絶対的な強さを誇る横綱がデーンとかまえて、睨みをきかせている。それがいいわけです。そういう存在の人がいるから、われわれもそれに向かって、「もっと強くなろう」ってがんばれるんです。つまり、がんばり甲斐が、2倍、3倍あったというわけです。

保志もそうだったはずですよ。同じ部屋に最強の大将(千代の富士)がいる。毎日毎日、大将の胸を借りて稽古しているというのは、強みですよ。同じ部屋だから、本場所での対戦はないけれど、「いつか大将に追いつくんだ」という強い気持ちが、保志を横綱にさせたと思います。

相撲という競技がそういうふうに、気持ちを掻き立てるものなのでしょう。自分が「これだ」という目標を決めて、自分自身をプラスアルファしていける競技なんです。

私が生まれたのは、三重県の津市です。

力士時代は、身長199センチで、体重がマックスで160キロ。こんな私だから、小さい頃から大きな子供だったんじゃないかと思われがちですが、小学生の頃なんかは細かったんですよ。身長は、それなりに高かったんですけどね。

通っていた小学校に、たまたま相撲の土俵ができたんです。そこで相撲を取るうちに、だんだん相撲が楽しくなってきましたね。中学に進んでも相撲を続けようと思っていたんですが、中学校には土俵がなかった。だから、市内にある津相撲クラブで相撲を習いました。相撲ばかりをしていたわけじゃなくて、毎朝5キロくらい走ってもしましたね。中学を卒業する頃には、195センチになっていました。

入門当時の写真を見せると、みんなビックリします。ザンバラ髪に、あばら骨が見えているんだから  
...。まるで、バスケットボールの選手みたいな体でしたよ。

入門に際して、父と母は、「高校に行きなさい」と反対しましたが、私は相撲の道に進もうと決心  
していましたので、反対に心が揺れることはなかったですね。

冒頭に言ったように、幕下まで上がるまでは早かったです。

序の口でいきなり、7戦全勝で優勝。序二段は2場所で通過し、三段目では一度負け越しただけ。

それで幕下に上がったんですが、結局、幕下を卒業するのに、3年近くかかってしまいました。人に  
は、やはり壁というものがあるんですね。その人、その人によって、どの地点で壁が来るかというのが  
違うわけで、私の場合の壁は、幕下と十両の間にあったんですね。

昭和59年、20歳で新十両に昇進して、その1年後には小結になっていました。一つの壁を崩したら、  
前が見えてきました。毎場所のように三賞をいただいて、パソコンが趣味だったこともあって、「新人  
類」などと、めずらしい人種のような言われ方もしました。

私にとって、生涯でもっとも感慨深い取り組みもこの頃でした。

昭和59年九州場所のことです。この場所の3日目、私は横綱北の湖関（現北の湖親方）と対戦しまし  
た。北の湖関といえば昭和の大横綱であり、私が入門した時、すで横綱として君臨していた方です。

北の湖関のようになりたい。

これは、私が入門当初から思っていたことです。ふてぶてしい土俵態度から、「憎らしいほど強い」  
と言われたりもしましたが、私にとっては相撲のすべてがお手本であり、目標だったのです。

ですから、「目標とする力士は誰ですか？」と聞かれた時でも、私は必ず北の湖関の名前を挙げました。普通なら、自分が所属する部屋の先輩力士の名前を挙げるものなのですが、私は他の部屋の横綱の名前を出すので、それが原因でずいぶんいじめられたものですよ。

北の湖関は翌昭和60年初場所、両国国技館ができたその場所限りで引退されているんです。ですから、私に対戦したのは引退の前の場所ということになるのですが、対戦できたこと自体が、もううれしくて...。自分が目標としてきた力士と対戦できる喜び。とにかく、負けてもいい、と。

結果は私が勝ったんです。でも、そういうことじゃなくて、21歳で自分の夢が叶ったという気持ちが強かったです。この時が、最初で最後の取り組みになってしまったことも、なにか運命のようなものを感じましたね。

61年初場所で、新大関に昇進しました。この頃は、もう毎日が夢中というか、常に本場所、時間に追われるような、恐怖に苛まれていたような気がします。でも、そのプレッシャーがむしろ、私を後押ししてくれるような戦い方になっていったようにも思います。

三役時代、多少のケガもありました。足の親指の付け根を傷めて、場所の途中で休場せざるをえなくなって4日ほど休みましたが、13日目から再出場して相撲を取りました。

当時は、公傷制度というのがあって、本場所中の相撲でケガをして休場しても、翌々場所は番付を据え置くという優遇措置だったのですが、私たちの時代は、公傷制度を使うこと自体よくないという考え方が関取衆の間で浸透していたので、ケガをしたからとってのんびり休んで治療するという感じじゃなかった。そんな厳しさが、私にとって逆によかったんだと思います。

61年秋場所、横綱に昇進した場所は、7日目から途中休場という事態となってしまいました。

大関と横綱の決定的な違い、それは責任感です。横綱に昇進したことが、責任を産むのです。大関までというのは、どうしても目標に向かっている過程なんですね。達成感というものはない。

当時の春日野理事長（元横綱・栃錦）から、いつも言われていたことがあるんです。

「横綱というのは、桜の花が散るとき、武士のごとくあらなければいけない。だから、自分の引き際というものを、常に大切に下さい」

昇進してすぐから、こう言われたんですよ。

この言葉を心に刻んで、とにかく自分にとっての引き際は大切にしなきゃいけないと…。心に一分(いちぶん)という意味での心構えを、強く刻みこまなければ。

横綱というものは、いつも結果を求められる立場でもあります。結果的に私は、相撲を辞める時まで、幕内最高優勝を成し遂げることができませんでした。でも、優勝だけじゃなくて、いかに目の前の相手を破るかという重要性、本分を貫くことも大切でなんではないか？

横綱とはどうあるべきか。どうも私はそういうことばかり、考えていたように思います。

私の所属していた立浪部屋には、かつて双葉山、羽黒山という二人の大横綱がいらっしゃいました。横綱昇進後に本名の北尾から改名した「双羽黒」という四股名は、大先輩の四股名の一部をいただいたものです。

横綱昇進後、つねに私は、二人の偉大な先輩のようにならなければいけないと、まわりの人たち、具体的には部屋の親方衆から言われ続けてきました。朝起きた時、食事時、稽古場で、「昔の双葉関、羽黒関はこうだった」と、24時間言われるわけです。

もちろん、親方衆が私を憎くて、そのような話をしてくださっているわけではないことは十分わかっていました。でも、「こうならなければいけない」「こうしなければいけない」と言われることに対する重圧。それこそが、私にとってはとてもつらいことだったのです。

私が考えるに、私を含めそれぞれの力士たちは、自分のオリジナリティを持って戦っている。私の場合も、オリジナリティを貫いた結果、横綱に上がることができたのです。指導者が、「こうしなければいけない」と考えを押しつけるのではなく、その個人個人のよさを大切にしてくれることこそが、大事なことなんじゃないかと思うのです。そうでなければ、一人の力士の将来がつぶれてしまう。現在、私は一線を退いていますが、若い力士に指導する機会がある時などは、その点には気をつけるようにしています。

とにかく、土俵で相撲を取るのは自分。自分しかないわけですからね。

まあ、そんな意味で、「双葉山、羽黒山のような大横綱にならなければいけない」と言われることで、私は自分なりのオリジナリティ性を否定されてしまったんです。それは、人間としてのオリジナリティにも通じるものがあります。

昇進した瞬間から、「後は引退しかない」と言われるのが、横綱です。横綱になった方のほとんどが、さまざまな重圧を抱えていたはずなんです。だから、みなさん横綱昇進後のほうが、ケガが多くなる。つらい時間が増えて、ケガも治りにくくなる。上がるまでは成績がいい、上がってからの成績は低い。こうした傾向は、私だけでなく、そういう方が多いように思います。

だから、重圧をいかに跳ねのけるかというところが、大横綱になるか否かの分岐点のよう気がします。

さっきの話に戻りますが、自分のオリジナリティを出している方というのは、大横綱になっていらっしゃる方だと思います。

私はいくらがんばっても、双葉山関や羽黒山関にはなれない。「私」でしかないんです。だから、親方衆が言ってくださっていたことを、それはそれとして聞き流すことができればよかったんでしょう。でも、伝説の横綱のお二人ですから、やっぱり「すごい」という気持ちを持たなければいけないんじゃないかとも思っていました。それとは別に、「俺は俺だよ」という気持ちを私が持っていたから、ある意味、つらい思いをしなくて済んだのかもしれない...と考えたりね。

四股名の問題もありました。こんなことを言うのは大変失礼なことかもしれませんが、横綱昇進を機に、「双羽黒」という四股名に改名したことは、不本意なことだったのです。私の本心としては、やはりそれまでの四股名、本名の北尾でいきたかった。本名で横綱を張られた、輪島関の例もあるので、前例がないというわけではなかったのですが、当時は、「どうしても、四股名を付けなければならない」と言われたことで、四股名を付けざるをえなかったんです。

実は、大関に昇進した時にも、「四股名を変えなさい」と言われていたんです。でも、私は頑として、それを受け付けなかった。四股名に対してそう言われてきたことに対して、純粹に受け止めなければという気持ち、そして自分の本心、その二つの気持ちが葛藤していたんでしょうね。

だけど、やっぱり相撲っておもしろいもので、ある程度、反発心がないと強くはなれないんですよ。素直に人の話を受け止めてしまう人っていうのは、上のほうにはいけない。



引退してしまいましたが、横綱の朝青龍ね、彼が出てきた時に「あいつは強くなるよ」って、私はずっと言ってたの。平幕の時くらいから、そう思っていましたよ。ああいう反発心がある精神と、ハングリー精神がないと、あれだけ強い横綱にはなれない。反発精神がありながら、なおかつ考える余裕がないとね。大横綱になれる要素が揃っている力士だと思っていました。

ともかく、自分との戦いなんですよ。自分自身がどうであるかであって、他人がどうであったかではない。人間性、相撲の技を含めて、みんながみんな違うわけで、自分と違う人物を真似るということは、不可能なんですよ。昔の伝統的なこととか、基本的なことを人に教えようとしても、基本的なこと自体、人それぞれ違う。最近、またそういうことを考えるようになってきました。

引退してから20余年の年月が流れました。

そんな歳月があったからこそ、指導の仕方などについても、再度考えるようになってきたのかもしれない。

現役当時、私と付け人たちとの確執などについて報道されたこともありました。

私は、自分のまわりにいた若い子たちに、少しでも楽をさせてあげたいという気持ちがありましたが、師匠（元立浪親方＝元関脇・羽黒山）は、昔風に、若い者にはつらい思いをさせないと強くなれないという考えだったので、そこに心のズレがあったように思います。

厳しくしなければならない。でも、厳しくしすぎることによって、中には崩れていく人もいます。けっして、厳しくするのが正しくないと言っているわけではありませんよ。ともかく私は、彼らに

優しくしてあげようという気持ちがあったことで、我慢して、我慢して強くなるという反発の力を呼んであげたことを、私自身が崩してしまったのではないかと反省もしています。

やっぱり、いつも身の回りの世話をしてくれる若い子たちを見ていると、かわいくなります。私は、彼らをしょっちゅう外食に連れて行っていました。相撲部屋での食というのは、昼はちゃんこ鍋で、夜は焼き魚とかのある程度決まった食事で、私の部屋の場合、そういいと言えるような食事ではなかったんです。でも、私は相撲をがんばった結果、外食したり、贅沢なものを食べることもできる。身銭を切って私がそうすることで、彼らにも「いつかはこういうおいしいものを、自分のお金で食べられるように、相撲をがんばろう」と思ってほしかった。でも、それが彼らの足を引っ張ってしまったんですね。自分だけおいしい物を食べて、付け人たちには食べさせないなんてことは、私にはできなかったんです、どうしても。

相撲界は弱肉強食の世界です。序列を作り、「なにくそ！」という気持ちを持つことで上に行く。伝統的にそうした世界を作り上げてきたわけなので、間違いではありません。でも、修行途中で、精神的な部分がまだ未熟な人間に贅沢をさせたり、わがままを聞いたりすると、こういうことになってしまう。相手をつぶしてしまうことだったんだということを、当時の自分は把握できていなかった。私自身の心の未熟さだっと思ってます。

横綱に昇進して、2場所目は12勝、次の場所も12勝。でも、翌場所はヒザのケガで途中休場。それから3場所は思うような成績が残せませんでした。

62年九州場所前、場所前の優勝予想というのがあるんですが、その時に五分の四の親方衆が私の名前を挙げてくれました。久しぶりに稽古もできていました。当時、千代の富士、大乃国、北勝海、私の四横綱時代です。でも、その時は、千代の富士関以外の横綱は、まったく眼中になかった。「打倒・千代の富士」。もうそれだけでしたね。

打倒・千代の富士。横綱になって忘れかけていましたが、今一度、忘れかけていた高い目標を持つことで、九州場所を迎えるにあたって、原点に戻れたというのと、気持ち的に吹っ切れたところがあったように思います。

そうした気持ちが相撲の勢いにも伝わりました。初日から13連勝。これは私にとって、初めての経験でした。14日目には北勝海、千秋楽に千代の富士関に敗れてしまいましたが、私は久しぶりに充実した気持ちで場所を終えることができたのです。

年も押し迫って、私は冬巡業から帰京。ところが、これまでのことなども含めて、師匠と意見が対立してしまい、お互いに歩み寄ればよかったんですが、なかなかそういうわけにもいかなかった。

私は、部屋の個室とは別に、自分で別にマンションを借りていたので、自分のマンションで冷静さを取り戻そうと思いました。しばらく頭を冷やしたら、また師匠と話をするつもりでいました。ところが、その最中に当時のおかみさんが、マスコミ各社に電話をしたことで、事態は最悪に次ぐ最悪になってしまった。師匠と私は「廃業」などという選択をするつもりは、毛頭なかったんですよ。

ふがなかったですね、自分が。それと、決断という意味では、横綱に昇進してから、皆様のご期待に叶うような成績が残せなかったことにも、責任を感じていました。体のほうも、思うような感じじ

やなかったですね。私のように短時間で横綱に上がった者というのは、体にも負担がないわけじゃないんですよ。24歳かもしれないですけど、体はボロボロになってきていました。

そういう意味でもふがいがなかった。体を治すために、半年とか1年くらい休場できるのであれば、また違っていたんでしょうが、当時の風潮としては、1場所休むと次の場所は引退という感じでしたからね。それもできませんでした。責任を感じてもしました。

春日野理事長に言われていた「桜の花の散るごとく去れ」という教えを貫かなければならないと思いましたが。横綱という頂点に立った者としてね。

相撲界を去るにあたって、不思議と後悔はなかったです。

心残りが無いと言えは嘘になるかもしれないけれど、自分の気持ちに対して、素直でありたいし、そうでもなくていいかと思っていましたのでね。宝物を落としてしまったとき、「ああ、もったいなかった」「ああすればよかった」なんていうことは絶対ないです。それだけは言える。

ただ、やり残したことは、多々ありましたけどね。それはなんて言ったらいいんだろう。相撲という道の中で、やり残したことという意味でなんですけどね。

私は優勝ができなかったのが、優勝回数うんぬんということは、いつも周囲から言われていたことでした。でも、自分にとっては優勝は結果でしかないの、マイナスもプラスもない。つまり、「結果でしかない」のだけれど、自分のために一生懸命やっているんだという気持ちを、もっと強さに加えられていたら、私も違っていたのかなってね。

横綱ってというのは、人間が持っている根底を自負するものだと思うんです。それが強ければ強いほど、強い横綱であるわけです。これは相撲だけじゃなくて、他のスポーツや職業、すべてに通じるもの。自負することが、人間にとって一番大切なことなんじゃないかと思うんですよ。

ここ数年、朝青龍の一人横綱が続き、その後は白鵬の一人横綱という状況になっています。次の横綱候補は？ といわれても、大関陣たちも一進一退でなかなか這い上がってこれない。でも、私に言わせれば、ちょっとクセを治せばすぐ上がれる人がいっぱいいますよ。見ているすぐわかります。自分には見えないけれど、人は必ずクセというものを持っています。クセを治す貪欲さを持つ人は強くなるけれど、クセをクセと認めない人は低迷する。

だから、朝青龍という横綱は、自分のクセを治すこと、自分の悪いところをどうすればよくなるのかということに、すごく貪欲だったんじゃないのかな？ 最近の現役力士の中では、それがある意味での、ハングリーさに通じるものがあるのかな。だから、そういうところを、大関以下の人たちには持ってもらいたいなぁと思っています。本当に、彼の吸収力というのは、半端じゃないですよ。先輩横綱に対しても、自分のどこが悪いのいかとうことを、常にぶつけて模索していた。

日本人のいいところって、「黙っていてもわかる」というところなのではないでしょうか。あの時代から年月がたつほどに、そういう考え方というものが、私の心の中で強くなっているような気がします。この場面では相手の気持ちをわかってあげなければいけないとか、その場面では言わないとか、やらないというところが、ある意味、相手に対する配慮とか遠慮なのかなぁと。

プロレスや武道家、これまでいろいろなものにチャレンジしましたが、今私は、表立った活動は、特にしていません。このまま時が経って、風化されればいいかなぁという気持ちだけですわ。